

春浅し岸辺に遠き川の水 圭舟

今は川幅が狭くなっている水面が、奔る雪解け水で岸辺を洗う季節が間もなくやってくる。

3月の幹事会

① 弔慰規定のこと

支部の現行では、弔慰金、供花、弔電の対象を本人、配偶者、本人の実父母、としているが、実父母死亡の場合には、連絡が無い、大分後になってから判る、その際に弔慰金の辞退がある、などのことから、会としての弔慰を表すのに本来望ましい上記3点セットが機能していない実態にある。対象を、実父母をはずして本人と配偶者にすることで総会に諮ることとする。

② 本部規約第6条（会員の資格）の改定（第2項の削除）の確認

第2項（退職後引き続き会社の嘱託社員、関連会社などに再雇用された者については、当該雇用期間終了後に会員資格を得る）を削除して、日新火災を退職すれば直ちに資格を得ることにして、入会資格を早めた。

③ 21年度総会

時期、会場、アトラクションなどの相談。

4月の行事

	みつわ会	みちのく損保
4月 8日（水）	幹事会4時～ 終了後二水会	
15日（水）		幹事会
22日（水）		ゴルフ
24日（金）		盛岡を偲ぶ会

会社の人事異動（4月1日付）

小林中東北統括営業部長が長野に。

玉井東北損害サービス部長が大阪に。

お世話になりました。赴任先でも楽しく過ごされます様。



20年度総会の予告

日時 5月26日（火）午後4時

会場 仙台ホテル（仙台駅から徒歩2分。昨年と違います!）

詳細は5月支部便りで出欠ハガキと一緒に

芭蕉の辻物語 4 (6) 葛西洋一

(6) 明治維新前後

まだ市役所もなく、県庁の近く（南）に宮城県師範学校、定禅寺跡に陸軍病院、片平町の東、東北大の地は、陸軍省用地と宮城県監獄所、これらは武士の屋敷跡であった。その西に片平町小学校と裁判所ができています。（1880年発行仙台区全図による）

明治維新の際、仙台藩は佐幕派として戊辰の役に敗れ、幕府に届けた102万石のうち28万石を与えられた。しかし家来二人は戦犯として東京へ連れ去られ、藩主も上京を強いられた。藩にはこのとき百数十万両の借金があり、本来藩主は1割まで許されたのに、百分の一の28万俵を、一門も約百分の1の130俵、一家以下二十分の1の55俵、大番士100万石以上10分の1の25俵、100万石以下3分の1の16俵、組士2.5分の112俵、凡下2分の1の9・8俵に減俸して借金を払おうとした。

仙台の領地外になった、仙南、仙北、岩手県南5群の家来は、仙台に来なければこの扶助米はもらえず、仙台に住むことが出来なくなった武士で、田舎に家のあった武士は帰農し、仙台の人口は約5万となり、市街地は縮小し、場末の武士屋敷は更に田畑化した。

武士の中には北海道の開拓に渡り、中には五稜郭に立て籠もり、捕えられ処刑された者もあった。

仙台の街々はさびれたが、これに反して、国分町など国道沿いの商人町などは繁盛した。今まで許されなかった遊郭なども軒を連ね、北目町などは松浦座という劇場もできた。

会社（日新火災）の裏に肴町公園があるが、その町名通り、仙台の御符代町の一つとして通商（五十集）の町として栄えたが、開町のエピソードとして、関ヶ原の戦いに敗れた土佐藩長曾我部の残党が仙台藩を頼り落ちのびて、土佐の経験を生かして、町々のために尽くしたという。明治維新後も連日のように市場が開かれ、仲買人が競る威勢の良い声がかつては肴街浜祭りを開き、凝った七夕飾りを楽しませてくれたそうだが、その後藩士の屋敷町になった。前にも述べたように、文政の肴町大火で焼かれた芭蕉の辻の隅櫓も、その際再建されたのが昭和まで残り、改正で町名も消え、肴街通りという通り名と、それに面した肴町公園の呼び名として残った。

同様に、御符代町の一つだった南町が、幹線大町と交差する町として生まれ、専売品として「荒物御日市」という市を6年に一度開いたという。南町には、今の銀行のような両

替所が設置され、豪商などの手形を発行し、金融の便をはかって明治維新に至った。明治6年（1873）に警察署の前身、「巡邏屯所」がおかれ、巡查希望の旧藩士も多く、人材揃いの点で日本一と言われた。明治10年には国分町にかわって警察署と改称された。

明治8年に仙台郵便局が開局し、今までの飛脚便と比べると非常に安くなった。

（6）明治時代

仙台の街並みの最も大きな変化は、明治20年（1887）の鉄道開通の時であった。宮城野の北西端に出来る筈であった仙台駅が現在地に出来た。すると、元寺小路、名掛町と南町通りは交通の要路となった。仙台の発展計画は線路によって分断され、東と西に分断される結果になった。

その後街並みを大きく変えたのは**市電開通**であったが、それまでの仙台市の範囲は、藩政時代とほぼ同じであった。

人口53,000人の仙台は、50年後の大正9年（1920）の第1回国勢調査の時に11万8千あったが、昭和初期の不況時代には、物価の安い静かな住みよい町となり、軍人、局員、官吏の老後の住居地となり、人口も増加に転じた。

明治以来、第2師団の軍隊、第二高等学校（旧制）、中央官庁の出先機関、私立学校、県立、市立と学校も増え、明治末年以来、東北大学も出来、軍隊、学校、官庁の町となった。中央出先機関の多いことでは大阪に次いで第二位と語られたほどであった。

養賢堂は県庁となり、二の丸に鎮台が置かれ、榴ヶ岡には洋風の第四連隊が新築され、鎮台の道路はまっすぐでなだらかな坂とされ、師団の正面も一直線の坂となった。

芭蕉の辻付近は変化と火災が多い。

明治15年（1882）藤崎が東一番町角に進出

〃 23年（1890）芭蕉の辻東南角、馬淵善吉本店焼失

〃 23年（1890）芭蕉の辻東北角若松や焼失

〃 35年（1902）芭蕉の辻西南角田中時計店焼失

〃 36年（1903）芭蕉の辻東南角に七十七銀行本店新築

仙台市電廃止記念



仙台市交通局

仙台市電廃止記念



仙台市交通局



記念乗車券は、鉄道マニアでもある関西支部の東村道郎氏が、数十年にわたって、会社の仕事の数倍の情熱と時間を注いで（笑）蒐集したものの一つです。

三六会（昭和36年入社組）の誼で、支部便りの足しにでも、とメールしてきました。他にもガラクタが多数ある模様で、趣味もこのランクに入るとちょっと驚きなのです。